

西脇順三郎コレクション  
第I巻  
詩集1

全卷編集

新倉俊一

西脇順三郎コレクション 第一巻 詩集1 目次

*ambarvalia*

LE MONDE ANCIEN

コリコスの歌 4

ギリシア的抒情詩

天気 5

カプリの牧人 5

雨 6

葦 7

太陽 7

手 8

眼 9

皿 10

栗の葉 10

ガラス杯 11

カリマユスの頭と Voyage Pittoresque 13

拉典哀歌

Carullus 16

Ambarvalia 18

ヴィーナス祭の前晩 20

哀歌 22

LE MONDE MODERNE

馥郁タル火夫 28

紙芝居	Shylockiade	30
恋歌		37
失樂園		49
世界開闢説		49
内面的に深き日記		53
林檎と蛇		57
風のバラ		61
薔薇物語		68
五月		71
旅人		71
コップの原始性		72
理髪		73
セーロン		73
歯医者		74
ホメロスを読む男		75

旅人かへらず

はしがき 幻影の人と女

79

一 旅人は待てよ 81

二 窓に 82

三 自然の世の淋しき 82

四 かたい庭 82

五 やぶがらし 83

六 梅の樹脂 83

七 りんだうの咲く家の 84

八 あのささやき 84

九 十二月になつてしまつた

85

- 一〇 十二月の末頃 86
- 一一 ばらといふ字はどうしても 87
- 一二 浮草うきくさに 87
- 一三 梨の花が散る時分 88
- 一四 暮れるともなく暮れる 88
- 一五 行く道のかすかなる 89
- 一六 ひすいの情念 89
- 一七 珊瑚の玉に 89
- 一八 白妙の唐衣からごろもきる松が枝に 89
- 一九 桜の夜は明けて 90
- 二〇 藪に花が咲く頃 90
- 二一 昔の日 90
- 二二 あの頃桜狩りに 91
- 二三 三寸程の土のパイプをくはへた 91
- 二四 雨のしづくを含むはぼたん 92
- 二五 「通つて来た田舎路は大分 92

- 二六 堇は 93
- 二七 古のちぎり 93
- 二八 学問もやれず 94
- 二九 蒼白なるもの 95
- 三〇 春には 95
- 三一 犬のをかしく戯れる 96
- 三二 落ちくぼむ岩 96
- 三三 櫟くぬぎのまがり立つ 97
- 三四 思ひはふるへる 97
- 三五 青いどんぐりの先が 98
- 三六 はしばみの眼 98
- 三七 暮るるともなき日の 98
- 三八 窓に櫟の枯葉が溜る頃 99
- 三九 九月の始め 99
- 四〇 窓口にたふれるやうに曲つた幹を 101
- 四一 高等師範の先生と一緒に 101



- 四二 のぼりとから調布の方へ 102  
 四三 或る秋の午後 103  
 四四 小平村を横ぎる街道 104  
 四五 あけてある窓の淋しき 104  
 四六 武蔵野を歩いてゐたあの頃 105  
 四七 百草園の馬之助さんは 106  
 四八 あの頃のこと 106  
 四九 きりぎりすの声 107  
 五〇 どんぐりの実のやさしき 107  
 五一 青銅がほしい 107  
 五二 炎天に花咲く 108  
 五三 岩石の淋しさ 108  
 五四 女郎花の咲く晩 109  
 五五 くもの巣のはる藪をのぞく 109  
 五六 榎の木の青いどんぐりの淋しさ 109  
 五七 さいかちの花咲く小路に迷ふ 110

- 五八 土の幻影 110  
 五九 とびの鳴く 110  
 六〇 女の笑ふ寝顔 111  
 六一 九月の一日 111  
 六二 心は乱れ 112  
 六三 地獄の業をなす男の 112  
 六四 坂道で雉の声をきく 113  
 六五 よせから 113  
 六六 野辺に出てみると 113  
 六七 こほろぎも鳴きやみ 114  
 六八 岩の上に曲つてゐる樹に 114  
 六九 夕顔のうすみどりの 114  
 七〇 都の街を歩いてゐた朝 115  
 七一 河柳の葉に 115  
 七二 昔法師の書いた本に 116  
 七三 河原の砂地に幾千といふ 116

- 七四 秋の日も昔のこと 117  
 七五 誰が忘れて行つたのか 118  
 七六 木のぼりして 118  
 七七 むさし野を行く旅者よたびもの  
 七八 こま駅で夏の末 119  
 七九 九月になると 119  
 八〇 秋の日ひとり 120  
 八一 昔の日の悲しき 120  
 八二 鬼百合の咲く 121  
 八三 雲の水に映る頃 121  
 八四 耳に銀貨をはさみ 122  
 八五 よもぎの藪に 122  
 八六 腐つた橋のまがりに 123  
 八七 古木のうつろに 123  
 八八 女郎観音の唐画 124  
 八九 竹が道にしたたる 124

- 九〇 渡し場に 125  
 九一 或る女がゴーガンの絵と 125  
 九二 あの頃の秋の日 126  
 九三 暗いはたごやの二階で 126  
 九四 「失はれた浄土」は盲人の書いた地獄 127  
 九五 ロココの女 128  
 九六 春はまだ浅い 128  
 九七 風は庭をめぐり 130  
 九八 露にしめる 130  
 九九 ゴブラン織の淋しさ 130  
 一〇〇 垣根の 131  
 一〇一 水色の葫蘆のさがる町 131  
 一〇二 草の実の 132  
 一〇三 庭の 132  
 一〇四 八月の末にはもう 133  
 一〇五 虫の鳴く声 133

一〇六	さびれ行く穀物の上	134
一〇七	なでしこの花の模様のついた	135
一〇八	むくの実が坂に降る頃	135
一〇九	ゐろりに	136
一一〇	八月の末頃	137
一一一	橡 <small>つるぼみ</small> に	139
一一二	とき色の幻影	139
一一三	あかのまんまの咲いてゐる	140
一一四	くぬぎの葉二三枚	140
一一五	西国の温泉にしようか	141
一一六	旅につかれて	141
一一七	雨の降る天をみながら	142
一一八	偉大な小説には	143
一一九	人間の声の中へ	143
一二〇	色彩の世界の淋しき	143
一二一	何事か想ふ	144

一二二	十二月の初め	145
一二三	山の椿は	145
一二四	影のない曼陀羅の	146
一二五	向ふから	147
一二六	或る日のこと	147
一二七	恋人の暮色の中に	148
一二八	何者かの投げた	148
一二九	むらさき水晶	148
一三〇	桃の木に彫む	149
一三一	衣裳哲学こそ	149
一三二	茶碗のまろき	149
一三三	錦の織物	150
一三四	榎の古木くちる	150
一三五	花咲くいばらの垣根	150
一三六	名の知れぬ石の幻像に	151
一三七	秋のきりん草の中へ	151

- 一三八 野に咲く 151  
 一三九 しやくやくの咲く 152  
 一四〇 秋の夜の悲しき手を 152  
 一四一 野に摘む花に 153  
 一四二 たそがれの色に 153  
 一四三 何者か 154  
 一四四 秋の日のよろめきに 154  
 一四五 村の狂人まるはだかで 155  
 一四六 茄子に穴をあけ 155  
 一四七 庭の隅人知れず 155  
 一四八 風になびく金髪の少年 157  
 一四九 夏の日は 157  
 一五〇 斑猫の出る街道を 158  
 一五一 折にふれ人知れず 159  
 一五二 杉菜を摘む 159  
 一五三 うららかな情念のまがり 160

- 一五四 座敷の廊下を行くと 160  
 一五五 何事をか語る 160  
 一五六 ふところパン粉を入れ 161  
 一五七 旅に出る時は 162  
 一五八 旅から旅へもどる 163  
 一五九 山のくぼみに溜る木の実に 164  
 一六〇 草の色 164  
 一六一 秋の夜は 165  
 一六二 秋の夜の雨 168  
 一六三 世の中に奇蹟の現れをみるため 168  
 一六四 めざめる夢をみる男の如く 170  
 一六五 心の根の互にからまる 173  
 一六六 若葉の里 175  
 一六七 山から下り 176  
 一六八 永劫の根に触れ 177



近代の寓話

(序)

181

近代の寓話

183

キャサリン

186

アン・ヴァロニカ

190

冬の日

191

秋

194

秋の写真

195

梅のにかさ

198

南画の間

200

☆ (マチスのデッサンに)

202

桃の国

204

枇	一月	ナラ	粘土	かなしみ	アタランタのカリドン	山の酒	夏（失われたりんぼくの実）	甲州街道を	午後の訪問	磁器	人間の記念として	山楂の実	梨	冬の日	無常
241	240	238	234	231		224		219	216	215		212	210	208	206
					226		220				214				

	庭に堇が咲くのも	242
	道路	246
	五月	248
	冬の会話	251
	夏から秋へ	252
	詩	256
	地獄の早魃	257
	フェト・シャンペートル	262
	呼びとめられて	269
	草の葉（鍛冶屋のために）	276
	夏の日	281
	花や毛虫	284
	燈台へ行く道	286
	山の暦（イン・メモリアム）	288
	イフィヂエネアの剝脱	294
	生命の祭祀	296

野の会話 302

留守 308

プロサラミヨン 310

たおやめ 312

かざり 317

紀行 319

修辞学 325

自然詩人ドルベンの悲しみ 327

体裁のいゝ景色（人間時代の遺留品）

ESTHÉTIQUE FORAINE 347

331

解説（井上輝夫） 349

回想の西脇順三郎（瀧口修造）

361

初出一覧 365

後記 371

*ambarvalia*

# LE MONDE ANCIEN

## コリコスの歌

浮き上れ、ミユウズよ。

汝は最近あまり深く。ポエジイの中にもぐつてゐる。

汝の吹く音楽はアビドス人には聞えない。

汝の喉のカーブはアビドス人の心臓になるやうに。

ギリシア的抒情詩

天気

(覆くつがへされた宝石)のやうな朝  
何人か戸口にて誰かとさゝやく  
それは神の生誕の日。

カプリの牧人

春の朝でも



我がシ、リヤのバイブは秋の音がする。  
幾千年の思ひをたどり。

## 雨

南風は柔い女神をもたらした。  
青銅をぬらした、噴水をぬらした、  
ツバメの羽と黄金の毛をぬらした、  
潮をぬらし、砂をぬらし、魚をぬらした。  
静かに寺院と風呂場と劇場をぬらした、  
この静かな柔い女神の行列が  
私の舌をぬらした。

## 堇

コク・テール作りはみすぼらしい銅銭振りで  
あるがギリシヤの調合は黄金の音がする。

「灰色の堇」といふバーへ行つてみたまへ。

バコスの血とニムフの新しい涙が混合されて  
暗黒の不滅の生命が泡をふき

車輪のやうに大きなヒラメと共に薫る。

## 太陽

カルモゼインの田舎は大理石の産地で

其処で私は夏をすごしたことがあつた。

ヒバリもゐないし、蛇も出ない。

ただ青いスモ、の藪から太陽が出て

またスモ、の藪へ沈む。

少年は小川でドルフィンを捉へて笑つた。

## 手

精霊の動脈が切れ、神のフィルムが切れ、

枯れ果てた材木の中を通して夢みる精気の

手をとつて、唇の暗黒をさぐるとき、

忍冬の花が延びて、岩を薫らし森を殺す。

小鳥の首と宝石のたそがれに手をのばし、

夢みるこの手にスマイルナの夢がある。

燃える薔薇の藪。

## 眼

白い波が頭へとびかゝつてくる七月に  
南方の奇麗な町をすぎる。

静かな庭が旅人のために眠つてゐる。

薔薇に砂に水

薔薇に霞む心

石に刻まれた髪

石に刻まれた音

石に刻まれた眼は永遠に開く。

皿

黄色い莖が咲く頃の昔、  
海豚は天にも海にも頭をもたげ、  
尖った船に花が飾られ  
ディオニソスは夢みつゝ航海する  
模様のある皿の中で顔を洗つて  
宝石商人と一緒に地中海を渡つた  
その少年の名は忘れられた。  
ウララカ  
麗な忘却の朝。

栗の葉

豌豆の豆の花がさいて

眼が細くなつた

夜がきた

魚も僕も眠つた。

栗の葉のさゝやきの中に

*Mund* の声がする

ナイチンゲールがないて

夜があけてきた

僕の頭が大理石の上に薔薇の影となる。

## ガラス杯

白い堇の光り。

光りは半島をめぐり

我が指環の世界は暗没する。

灌木のコツプの笑ひ。

尖つた花が足指の中に開き

さしのばされた白い手は

三色堇の光線の中に匿かくされ

女神と抱擁する

形像は形像へ移転

壮麗な鏡の春に頬を映す

ガラスにプラタノスの葉がうつる

青くそつた眉にポリュアントスの花がうつる

寶石に涙がうつる。

昼ひるが海へ出て

夜が陸へはひる時

汝の髪が見えなくなる

すべての窓に汝の手がうつる。

ブリス、カーメン。

喜びの女が歩く

汝の言葉は

五月の閉とぎされた朝。

カリマユスの頭と Voyage Pittoresque

I

海へ海へ、タナグラの土地

しかしつかれて

宝石の盗賊のやうにひそかに



不知の地へ上陸して休んだ。

僕の煙りは立ちのぼり

アマリスの花が咲く庭にたなびいた。

土人の犬が強烈に耳をふつた。

千鳥が鳴き犬が鳴きさびしいところだ。

宝石へ水がかゝり

追憶と砂が波うつ。

テラコタの夢と知れ。

## II

宝石の角度を走る永遠の光りを追つたり

神と英雄とを求めてアイスキュロス

読み、年月の「めぐり」も忘れて

笛もパイプも吹かず長い間

なまぐさい教室で知識の樹にのぼった。

町へ出て、町を通りぬけて、

むかし鶯の鳴いた森の中へ行く。

重い心と足とは遠くさまよつた。

葉はアマリスの如くめざめて

指を肩にさゝやく如く、あてた。

心は虎の如く滑らかに動いた。

あゝ、秋か、カリマコスよ！

汝は蠟燭の女で、その焰と香りで

ハシバミの実と牧人の頬をふくらます。

黄金の風が汝の石をゆする時

僕を祝福せよ。

Carullus

雀よ、乙女は汝に戯れて、欠乏のかすかな悩みを医するものなれど、われにも汝と戯れしめよ、そして我が心の苦しみを軽くなさしめよ。(et tristis animi levare curas) しかもアタランタの長くとざされたる帯をひもとく黄色のアプリともなれ。

あ！ 愛よ、悲しめ、しかし我が乙女の雀は死せり。雀は何人も帰らざる暗黒の地に行つた。残酷なるオルクスの暗さ。我が乙女の眼はいまは、泣き、赤く、ふくれてゐる。

ピチユーニアより帰りしカトゥルスは彼の舟の航海の美しさをほめた。アドリアの海岸、アルキペラゴアの島々、トラキア、マルモーラ。

我がレズビアよ、生きて、愛さう。太陽はのぼり、沈むとも、我々は永遠の夜を通して眠るべし。数万年の接吻は年と共に数へられない。

アウレリーユウスとフリーユウスよ、汝等道楽者よ、我が詩が少し肉感享樂的であるために、

我も亦卑猥であると判断するな。眞の詩人は自ら貞淑ならざるべからず。けれども詩は必ずしもさうであるべきではない。詩に味と美を与へるには、詩には多少の肉感の快美と卑猥尾籠なるところがあるものとする。そして髭のない少年のためでなく、放蕩の故老のこはくなつた筋肉に好色の刺戟を与へるものとする。我が詩に数万の接吻を讀みて、我を女々しい者と汝等は考へるが、よせ。

プリアープスよ、汝に此の叢林を献ずる。汝はラムプサークスに汝の住地と森林をもつが。へレスポントの海岸は、特に牡蛎の名産地、その町々では汝を崇拜する。

プリアープスの歌をきけ。

乾ける櫛の樹から刻まれた、我は、少年達よ、この地を育てた。我は花咲く春の最初の産の輝いた花の花輪に、柔い穀物の柔い緑りの茎と耳に、飾られる。黄色い菫、黄色い罌子粟、青白い葫蘆、香ばしい林檎、影多い葡萄樹の下になつた赤い葡萄の実が我れに捧げられる。時には（このことは秘密にしてゐてくれないか）髭のある牡野羊と角足の牝野羊が我が祭壇を血をもつて汚される。（註 プリアープスの像は普通たち樹のまゝに刻まれて、手には鎌か、角杯か、すばらしく大きな phallus をもつてゐた。主として農園の神の一つであつた。）旅人よ、汝は我を拜むべし、手を触れるな。罰の道具として、この荒々しいファルスが用意されてゐる。これで君の頭をなぐるぞ。

スィルミヨよ、半島と島の輝ける眼よ、再び君を訪れるとは、なんと喜ばしいことである。

遠い旅につかれて帰つて来て、このソーファにかけるとは、チューニアやビチューニアの野を去つて、再び君を見るとは夢の気持である。

## Ambarvalia

こゝに集まるすべての人に恵を与へよ。古より伝はる儀式として我等は我が穀物と野を清める。バックスよ、我へ来れ、汝の角からたれさがる甘い葡萄をもつて、またセレースよ、汝の顛顛トメタミを麦の耳で飾れ。この神聖の日には、地も農夫も休ましめよ (*requiescat*)。すべてのものは神の式をあげよ。しかし昨夜愛の女神が飲菜を与へた祭壇には近づくな。天は清浄を欲する。着てくる着物は清かるべく、手は泉の水にて浄めよ。見よ、神に捧げる羊は光る祭壇に歩き、その後白い行列が歩き、彼等の頭髮は橄欖に飾られぬ。我先祖の神々よ、我等は野を清める、農民を清める。我等が領域から、あらゆる悪 (*malis*) を追ひ給へ。実の少い穀物をして収穫を侮蔑せしめるな。——我が祈禱はきかれた。見よ、予言する羊の内臓の具合を、神々は恵み深いことを知れ。くすむファレルヌスの葡萄酒を古い瓶から持ち来れ、キオスから来た瓶のヒモ